

序

春の候となり私たちも数千名の子供を送り、又新しく数千名の子供をむかえる頃となりました。振り返り見ますと私たち教師は何回とはなくこの時期をむかえ、又過ごしてまいりました。巢く子供たちをながめて、去りし日のことをふり返り、教科指導でうまくいったときのこと、苦しんだときのこと、学級経営のことで頭をなやましたこと、子供の生活の問題について夜まで口角にあわを飛ばして論議したときのこと、又立派に成長した子供を目の前に見たとき等々あれこれと思いうかべずにはいられないのがこの頃と思います。そして毎年毎年過ぎゆきを反省しては子供のためにより充実した学年をむかえるべく、いろいろと努力をして来たことを思います。

けれども、このだれしも経験する喜びや苦しみ、悩みを感傷的な受け止め方をしてはいけません。喜びや苦しみ、悩みも感傷的な受け止め方では「原動力」にはならないでしょう。もって去りし日目の喜び、苦しみ、悩みを受け止めることが来るべき年の「原動力」として働くことになると思います。

このせられた「教育実践の記録」はこのような意味での現場の先生方の喜びや苦しみ、悩みをもつて受け止められ、表現されたものであり、これを読まれる方々のために必ずや大きな力をあたえて下さることと思います。

さて御熟読、御検討をお願いする次第でございます。

今回の実践記録集の編集に当りましては諸先生が記録集を読まれる場合に、その記録の研究内容又は今後に残された問題等を知る場合に、いろいろ参考になるのではないかと思います。西海先生（西中、国語科）、新井健之先生（二中、社会科）、田米開七蔵先生（東小、理科）、長治先生（千歳小、特殊教育）、南木宏（教育研究所、保健（給食））の諸先生に講評をのせていただきました。記録とともにこの講評をよく御覧下さいまして今後の研究の「かて」にしていただき、幸せと思います。

ついに記録を応募下された先生方ならびに講評を分担してお寄せ下された先生方に改めてお礼を申し上げて序文といたします。

昭和 34 年 3 月

足利市教育研究所長 南 木 宏